

1.Summary

Chapter 7.「蜘蛛の巣」に捕らえられる ～統語変化は言語を通じてどのように行われるのか～

・イントロダクション

統語変化は一般的に言語にゆっくりと現れる現象である。多くの場合、話者はそのような変化が起きていることに気付かない。新しい形式と古い形式との間で変動し、だんだんと変化が表面化してくると、次の形式が出てくるまでそれが一部の話者の中で規範となるのである。統語変化は前兆なく起こるもので、まるで隠れた蜘蛛の巣のようにこっそり潜んでいて、言語の一部分をすばやくわなにかけてしまうのである。語彙の形や規則における変化である統語変化は、音変化と比べ、捉えにくく、ややこしいものである。例えばこの 500 年の間で英語に起こった変化として、動詞の屈折語尾の変化や、can の役割の変化、動詞を否定する not の置かれる位置の変化、などが挙げられる。統語変化をたどり記録することは困難なことである。しかしひとつははっきり言えることは、すべての統語変化は多様性を必要とするということである。文体が多様であることによって、変化が容易に起こるようになる。

・選択肢の変化

ある調査で、インド人とイギリス人の英語における否定文の作り方はほとんど同じだが、それぞれが好む構造が異なることが分かった。インド人が好む否定文の構造はヒンディー語のそれに基づいていて、このことはそれぞれが好ましいと思われる表現が異なる一因にもなっている。この結果から既存の選択肢の一つが重視されると、それによって変化が起こることが分かる。つまり選択肢が変化することは、統語変化が生まれるための重要なからくりなのである。

・こっそりと入る

統語変化は言語の中にこっそりと浸透していく。言語の弱点がある部分、新しく構造を再解釈できる部分にこっそり近づくのだ。ブラジルポルトガル語では、動詞の単数形と複数形の語尾の違いがなくなろうとしているが、これは come という動詞の複数形 comem から”m”が発音されなくなったことから生まれた変化である。古い形式と新しい形式の間の表面の差異において、”意味のないところ”から変化が始まり、差異が小さい方から変化していく。複数の方法で構造を分析する可

能性のある時、変化はネズミのように小さな穴から侵入してくる。一般の話者は、近くから言語を見ていて、広い範囲から言語変化の全体像を見ることができないのである。

・語彙にくつつく

統語変化は特定の語彙項目に顕著に依存する。これにより統語変化は言語において強い支配力を持つ。例えば統語変化の例として、最近の若者はしばしば特定の動詞の語尾に"s"をつける。我々は繰り返し聞くことで、徐々にそのような変化に順応していくが、一部の語彙項目にくつついて使用されるだけでは変化が始まることは、必ずしも保証されない。隠された言語的要素によって変化が押し進められたり、食い止められたりするからである。話者はたいていそれらの言語的要素に気づかないため、統語変化を支配することはできないのである。

・統語の雪玉

統語変化は、しばしばS字曲線を描き、「ゆっくり速く、速くゆっくり」進んでいく。雪玉のように、ゆっくり始まり、自力で坂を転がり落ち、即座にたくさんの他の環境を蓄積し、そしてスピードを落とす。統語変化はゆっくり行われるため、円滑なS字曲線は発見されにくく、それが存在しているのかどうか曖昧である。

・なだらかな施行となだらかな普及

統語変化は言語内でゆっくりと実施され、人から人へとゆっくりと広まっていく。変化はだんだんと受け入れられていくようになるのである。

Chapter 8. 言語の車輪（原動力） ～縮小と略語～

・序論（イントロダクション）

最近メールや携帯のテキストメッセージのせいで、"PTO" please turn over(裏面に続く)や、"RIP" rest in peace(安らかに眠れ)のような略語の数が増えてきている。また madam は ma'am になり、さらには Yes'm のように 'm になった。full(いっぱい)という言葉では、spoonfulに見られるような複合語、または hopeful(希望に満ちた)のように接辞になった。同様の例は、ほとんどすべての文で見受けられ、この切り取りのプロセスは文法的表示として知られている。この章の題「言語の車輪」は、文法的表示研究の父と称される 18 世紀の作家 John Home Tooke の引用であるが、当時は言葉の圧縮を悪化や摩滅の一種とされ、否定された。1912 年、

真の文法的表示の父と言われる言語学者 Antoine Meillet により、洞察的な文法的表示の重要性が気付かれ、類推より過激な変化を引き起こすと主張され、近年では言語学者たちも文法的表示は重要で広く行き渡るものだと思え始めており、文法的表示の推移は意味論的にも、文法的にも音声的にも言葉を変化させている。

・幾重にも重なる層

文法化は、単なる語法の変化ではない。幾重にも積み重なり、それは時により数世紀にわたるものもあり、それは“積み重ねること”と呼ばれてきた。新しい層は現れ続ける一方、古い層は新しい層の下に積み重なり、存在し続ける。

・予測可能なつながり

言葉の変化には方向性がある。1921 年 Edward Sapir によってそれは主張された。言語の連続変異やつながりはランダムに起こっているわけではない。連続変異はたいていの場合一方向である。川の流れは下ることしかなく上ることはないのと同様に、言語の変化も一方向にしか流れない。周期的に起こる連続変異は言語が今後どのように発展するかという道筋を照らすことのみならず、言語の再構築という役割も果たしている。

・言葉をかみ砕く

通時的に、言葉とは、巨大な表現を詰め込んだ機械と見なされてきた。しかし、言葉を砕く習慣が影響を与えるのは単語のみに留まらず、熟語にまで及んでいる。

・石化された言い回し

文法化は言語の構造の全体を包み込む毛布のように広がっている。これは切り倒された言葉だけでなく、会話をスムーズに運ぶための表現であるディスコースメーカーと同様石化された言い回しをも取り囲んでいる。

・桃とクリーム

通常、文法化の変更には形式と意味の両方が含まれる。しかし、形式と意味は電車や馬に導かれる荷物のように必然的に結びつくのか、はたまた別々に消費される桃とクリームのように別々に進化するのか。結果として2つのプロセスの間に決定的な関係は存在せず、結びつくというより相互に関係していることが判明した。

・テキストメッセージ

テキストメッセージは言語能力の衰えの原因となるのだろうか。一見そう見えるがこれは違う。構造やルールがいい加減なため、何かが間違っていると思われがちだが実際は、より複雑で新しい構造が生まれているのだ。この点を理解するためには、その新しいものがどのように生まれているのかを観察していく必要がある。

・ネット言葉

「ネット言葉」とは David Crystal による、「インターネット言語」の適切な言い方だ。テキストメッセージはおそらくネット言葉が最も広く使用されているタイプだ。しかしながら我々は、特に e メールに見られるネット言葉が今日の私たちの言葉に影響を与えているのかを問う必要がある。

2.Research

・現代日本語における「若者言葉」を、言語変化として考える

生きている言語は常に変化を続けており、現代日本語もちろん「生きている言語」であり、変化を続けている。これまでも現代日本語の「若者言葉」に見られる現象については、語彙などの部分的な研究はあっても、「言語変化」としての研究はされてこなかった。というのも、従来のルールでは説明ができないものが多いことが挙げられる。「若者言葉にみられる言語変化に関する研究」では、共時的かつ通時的に変化を分析するとともに、自然談話をも言語学的に分析することによって、十分な量の用例を集め、比較を可能とした。この比較の結果、現代日本語の「言語変化」は、活用変化と新しい語彙に関するものの二つに分類することができ、前者では動詞化接尾辞「—る」、後者では省略における造語といったものが挙げられる。結論として、「若者言葉」は独自のルールがありつつも、無秩序でなく、また脈々と受け継がれてきたものであることから、今後も同様な一定のルールに則った上で、新しい語彙や用法が生まれることが予測される。

3.Question

- ・最近出てきた日本語の略語にはどのようなものがあるだろうか。
- ・形容詞の後に「み」がくつつく若者言葉があるが、その形容詞に規則性はあるのか。そのような若者言葉は今後日本語全体に変化をもたらす可能性はあるか。
- ・SNSなどで使っている言葉遣いと対面での会話における言葉遣いに違いはあるか。あるとすればそれはなぜなのか。

4.Reference

堀尾 佳以 若者言葉にみられる言語変化に関する研究 九州大学 2015 芸術工学博士論文(未公開)